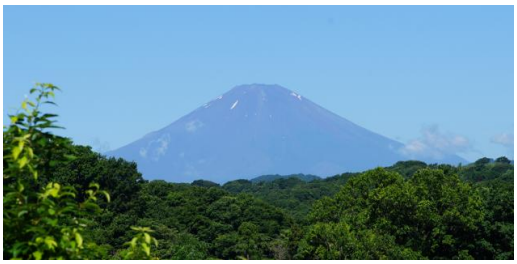
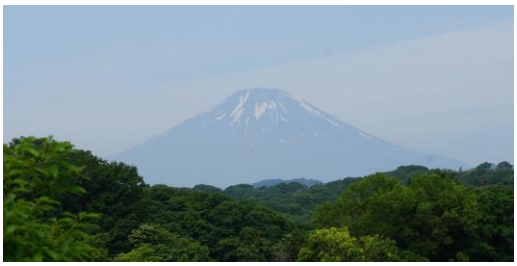
キャンパスの四季　Four Seasons in SHC　(No.43)　2015/07/15



＜梅雨の合間に＞おおよそひと月ぶりに富士が姿を見せました。ただ写真(右：7 月 13 日撮影)のように雪はもうほとんど残っていません。昨年の 7 月中旬には“残雪の富士”という趣がまだありました。今年 6 月初旬の写真と比べると昨年より 1 ヶ月ほど早いペースで雪の消えていく様子がよく分かります。

＜2014 年 7 月 11 日撮影＞

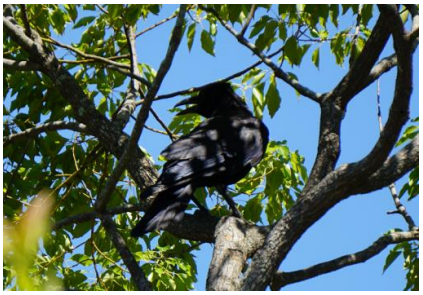


＜2015 年 6 月 5 日撮影＞

ところでこの 2 つの右写真（昨 7 月と今 6 月）の中央にある残雪はキツネの雪形に見えませんか? そして今年のキツネはうな垂れているような。

＜炎天の下＞梅雨空が一休みした途端に気温が 30 度を優に超える炎暑の日が 5 日ほど続きました。炎天の下、合歓の甘い匂いの漂う木陰でゆったりと過ごせばさぞ幸せな気分になろうかと想います。一方、炎天に似合う“ヒマワリ”はミツバチのごとく日向で飛び廻りエネルギーに溢れた人に相応しいですね。ヒマワリと言えばまずゴッホそして有名な映画もありました。しかし知っているようで知らないヒマワリです。種から油を採るロシアヒマワリの花は径 60cm にもなるそうです。日本には 18 世紀初めに伝わったとのことですが芭蕉や一茶はきっと目にしなかったのでしょう。明治以降になってどこにでも植えられるようになったのでしょうか、多くの俳人歌人が“向日葵（ひまわり）”を詠んでいます。目に付くのは「向日葵（ひまわり）が好きで狂ひて死にし画家(虚子)」や「向日葵の炎えてゴッホの絵となりぬ（前田陽子)」のようなヒマワリ≒ゴッホの連想です。そのほかには戦災を想う句です。ヒマワリはとりわけ 8 月 6 日から 15 日に繋がるのでしょう。

＜対照的＞黒は熱を吸収し易い色ですから「炎天下ではカラスも楽ではあるまい」とか川原で「カラスの行水を見かけるのも当たり前か」と、とりとめもないことを思ったりもします。炎天下の真昼に見かけたカラスはクスノキの木陰で荒い息をしているようでした。一方、噴水のあるプールにやってくるカルガモのカップルは悠々たるもので置物の如く直立しています。ところで、ツル、カモ、サギ、フラミンゴなどは躰を休めるとき何故に一本足で立つのでしょうか。両足の方が楽そうなのに。



(文と写真：松本正勝)